

日本基礎心理学会 第32回大会 特別企画講演

「つばきとひきつり」から情報処理へ —現代連合学習理論の50年—

From “spit-and-twitch” to information processing —Modern associative learning theories at fifty—

日 時：2013年12月8日（日）10:40～12:10
会 場：金沢市文化ホール（大会議室）
講 演 者：中島定彦（関西学院大学）
企画・司会：谷内 通（金沢大学）

企画の趣旨

古典的条件づけは、パヴロフによる発見と基本的事実の整理が行われ、他の学習諸現象の発見を刺激するとともに、学習理論にも大きな影響を与えてきました。しかしながら、入門書ではパヴロフのイヌやワトソンのアルパート坊やの例しか紹介されないことが多いため、学習心理学を専門としない学生や研究者にはパヴロフ以降の研究の展開についてはあまり知られていないように思われます。特に大きな展開としては、Rescorlaによる随伴性の概念等の情報価の概念の導入は、古典的条件づけが近接して生じた事象間の自動的な連合過程というよりも、生物学的に重要な事象を予測する上で他の事象をどのように活用するのかという、情報処理的な理解へと転換するものだったと考えられます。また、Rescorla-Wagnerモデルは、過去経験に基づいて予測された事象と実際に生じた事象の差異に基づいて連合強度が修正される過程を比較的単純なモデルによって整理し、多様な現象を説明するとともに、新たな現象を予測・発見することに成功しました。

その後、Rescorla-Wagnerモデルの問題点を追求する形で多様なモデルが提唱されてきましたが、この領域特有の実験条件の複雑さとも関連し、各モデルの特徴や支持する実験的事実を理解し、研究動向を把握することは容易ではありません。そこで、本大会では関西学院大学の中島定彦先生に解説を中心としたお話をお願いすることを企画しました。

講演では、代表的な実験法、Rescorla-Wagnerモデルの構造、古典的条件づけの基本的事実をどのように説明するのか、あるいは過剰予測効果といったRescorla-Wagnerモデルからの予測で発見された現象について解説されました。次いで、制止学習の点からMackintoshやPearce-Hallの注意モデルによる説明、およびWagnerによる短期記憶過程を取り入れたモデルについて説明されました。複数の刺激が要素の足し算以上のはたらきをする形態化学習については、Rescorlaのunique cue概念の導入とPearceモデルが紹介され、中島先生自身の実験結果からPearceモデルが支持されることについて解説されました。手がかり競合からの回復に関する回顧的評価現象について、コンパレータ仮説とその改訂版の解説とともに、Kamin (1968) がbackward blockingについて示唆的な実験結果を得ていたという歴史的事実についても紹介されました。最後に、1990年代以降に提案された多様なモデルの概要について概説されました。

本大会では学習心理学を専門とする参加者はあまり多くないことが予想されたため、分野外の方にどれくらいご参加いただけるかという点が心配されましたが、結果的には多くの参加者によって会場が埋まり、活発な質疑が行われました。企画意図の通り、普段はまとめて勉強する機会の少ない問題について整理するよい機会にできたのではないかと考えています。

（金沢大学 谷内 通）